近世からくり玩具の史料研究

――拳玉・御来迎・ずぼんぼ・猫と鼠――

安田　真紀子

はじめに

一般に江戸時代は庶民の文化が開花した時代といわれている。同時に、庶民文化としての遊戯や玩具が考案され、発展した時代でもある。とくに中期以降は、それまで家庭で親が子供に手作りで与えていた玩具も、生活の糧として製作・販売する者が出現してくる。また、都市などの一部で作られていた玩具も流通の発達により各地へと広がりをみせ、地方独特の玩具をも生み出して種類も急速に増加、「からくり」と呼ばれる仕掛けも複雑化してゆく。

そして、徐々に玩具は子供を対象としたものばかりでなく、大人の興味の対象となる。『絵本菊重ね』[1]や『江都二色』[2]といった玩具絵本が出版され、多くの書物の中で遊戯や玩具に関する考証がなされている。また、随筆や日記類にも玩具関係の記述が多く見られ、浮世絵などの絵画でも多種の玩具を確認することができる。

こうした江戸時代の玩具や遊具を記録した文献や絵画が多く存在するにもかかわらず、系統立ててこれらの史料をまとめたものが少ないのが現状である。

そこで、玩具別に文献を集め、史料集成を作成することとした。ここでは、江戸時代の技術や意匠、材料の特徴をよく表していると思われる、拳玉・御来迎・ずぼんぼ・猫と鼠の四種の玩具を取り上げ、各々の玩具に関する史料をまとめて、歴史的考察を加えた。今後の玩具史研究の一助となれば幸いである。

なお、ここに掲載した図は、対象となる玩具の形を明確にするため、周辺の図を削除するなど、若干の修正を加えてある。また、紙面の都合上、原図とは構成を一部変更し

ている。

(一) 拳玉

〈史料〉

〔1〕『拳会角力図会』下之巻[3]　義浪・吾雀篇述、文化六年（一八〇九）、村田屋治郎兵衛・河内屋太助刊

七　玉拳

これも図に出だせしごとく、唐桑・花梨・紫檀などのかたき木にてコップを造り（図のごとく、すこし長き形のコップなり）本に長き紐を付け、そのはしに同木にて造りたる玉を結び付け、右の木酒器へ彼の玉を五遍のうちに一遍すくひ入れるか、また三べんの中に一ぺんすくひ入れるか、いづれにても最初のきはめによりて玉をすくひ込み、勝まけをあらそふ。この拳、双方かはるがはるにする事なり（すくひそんじたるかたにさけを呑ますなり）。これも酒席に興ありて、はなはだ面白き拳なり（これ玉をすくひ込みて、その日その日の吉凶をこころみ、または待人などもこころみる事なり）。

木酒器玉之図

〔2〕『嬉遊笑覧』巻十上[4]　喜多村信節著、文政十三年（一八三〇）刊

安永六七年の頃拳玉と云もの出来たり、猪口の形して柄あるものなり、それに糸を付て先に玉を結たり、鹿角にて造る、其玉を投て猪口の如きものゝ凹みにうけ、さかしまに返して細きかたにとゞむるなり、若うけ得ざる者に酒を飲しむ

〔3〕『うなゐの友』二編[5]　清水晴風著、明治三十五年（一九〇二）刊

相州箱根
湯本製けん玉といふ

〈解説〉

けん玉は現在でもよく知られたおもちゃであるが、江戸時代には酒席での大人の遊具として用いられていた。『嬉遊笑覧』においても、拳玉は児戯の部ではなく飲食の部に収録されている。拳遊びばかりを集めた『拳会角力図会』に「七玉拳」として掲載されていることからもわかるように、けん玉は「木酒器玉」という道具を使った「拳」の一種であった。

同書には「木酒器玉」の図とともに遊び方が詳しく紹介されている。それによると、形はワイングラスに近く、遊び方は勝敗を競う二人で事前に回数を定め、そのうち一度でも玉をすくうことができれば勝ちというルールのようである。しかし『嬉遊笑覧』を見ると遊び方は異っており、くぼみに玉をうけた後、本体を逆さにして柄となる部分の先に止め置かなければならない。両書ともに、玉をすくい損じた者（敗者）に酒を飲ませるという点では共通しているが、遊び方に差異が見られるのは形に原因があると思われる。

『嬉遊笑覧』に拳玉の図は掲げられていないが、説明文から推察すると、形はワイングラスの底のないもの、つまり玉をすくうための盃の部分と「細きかた」＝柄の部分とで構成されていたのではないだろうか。その形は、明治になって描かれた『うなゐの友』でも知ることができる。また、「細きかたにとゞむるなり」とあることから、玉には穴があいていたとも考えられる。

現在のけん玉は、大中小の三つの「皿」と柄の先端をとがらせた「剣」と呼ばれる部分からなり、玉には剣に入れるための穴があいている。おそらく、先のとがった部分を剣と呼ぶことから、現在では「剣玉」と表記されるようになったのであろう。大正初期には「日月ボール」と呼ばれたけん玉が現在の形であったといわれている。『拳会角力図会』に見える木酒器玉がいつどのようにして現在の複雑な形のけん玉に変化していったのか定かではないが、『嬉遊笑覧』や『うなゐの友』に変遷の一端を窺い知ることができる。

(1) 御来迎

「御来迎」は、江戸時代の庶民に普及していた来迎思想を取り入れた玩具で、竹筒の中に折り畳んだ和紙と張り子や木で作った仏像が入っている。竹筒の外から出た棒を上

げると、竹筒の中から折り畳まれた和紙が開き、後光となって仏像とともに現れる。再び棒を下げると、後光は折り畳まれて竹筒の中へと納る。和紙の特性を巧みに利用した玩具である。

〈史料〉

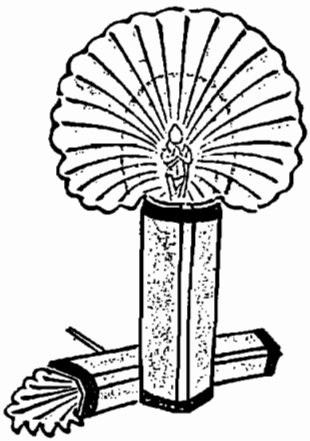
〔1〕『博多露左衛門色伝授』第三[6]　宝永五年（一七〇八）

序

①ついのかぶろやつれ男、わきてめにたつ有様に三重しばし詠めて「たちつどふ、竹のうちより光を出す、したいごらいかうは、大坂のしだしでごんざるゑい、此ゑい今はあづまの、はて迄も、くはつとはやりて京九重や、あの君たちの手にふれて、笑ひのたねと成もよし、

②かいてくどいて見せさきに、立とゞまりて色いとに、あづまことばも珍らしく、うらばめせめせみた三ぞんの御来迎、めせいざやめさぬか

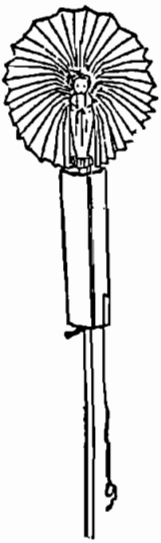
〔2〕『江都二色[7]』　北尾重政画・弄籟子讃、安永二年（一七七三）、鱗形屋孫兵衛刊



〔3〕『還魂紙料』上之巻[8]　柳亭種彦著、文政九年（一八二六）刊

来迎売

或老人の話に、むかし小児の翫弄に、仏の像を紙の張貫、又は木にてつくり、竹の筒の裏へをさめ、其竹の筒をさぐれば、紙にて畳たる後光ひらきて、仏もともにあらはるゝ機捩を、藁苞やうのものにさしならべ、是をうちか



たげて御来迎々々々と売きたりしといへり。

〔中古風俗志〕〔割註〕新見老人の昔々物語を仲慶といふ老人、明和元年に増補せし書なり。」に、古来より小児の翫物はしか〴〵といふ条に、「ぶりぶり、ぎてう、鈴守、ぴい〳〵、おきやがり小法師、この小法師いづれの時より歟、禅家の祖師達磨大師の尊形となれり。勿体なき事なり。鳩車、板の琴、御来迎のからくりは中古の物なり云々。」中古とはいつの比をさしていふ歟、元禄のころははや此手遊の流行しと見えて、土佐掾正勝が正本〔博多露左衛門色伝授〕といふ浄瑠璃に、彼露左衛門といふもの来迎売となりて、都島原へかよふことを載たり。「対の禿やつれ男、わきて目に立ありさまに、しばし詠めて立たまふ、竹のうちより光を出す、じたい御

正徳享保の比印行せし絵双六に見えたる来迎売の図也

来迎は、大坂のしだしでござる、今はあづまのはてまでも、くわつとはやりて京九重や、あの君たち手にふれて、笑ひの種となるもよし、中略、東詞もめづらしく、うらばめせ〳〵、弥陀三尊の御来迎めせ云々。」是元禄年間江戸にて編し浄瑠璃なり。〔割註〕此さうしに宝永五年とあるは、再刻の年号なり。さてこゝに彼手あそびは、大坂にてしだしゝやうにいへり、猶考べし。

又俳諧〔江戸名物鹿子〕〔割註〕享保十八年印本。」

「御来迎売

若竹や誰と孕てかくや姫　　素濃」

といふ句あり。画はきり竹をかきたれば摸し出さず。さて此句竹の筒よりいづるからくりを、竹のなかより生れしかくや姫にとりなし、光りをはなつを余情にこめたるなるべし。古老の話によりて画せたるまへの図によく合り。

此図（図略）[9]は近く安永二年鱗形屋が刊行せし〔江戸二色〕に見えたり。此さうしは江戸にてもてはやしゝ手遊びを、古き新しきを分たず、それとかれと二色づゝとりあつめて、江都二色と題り。画は重政、賛は弄籟子とか

くし名せる老人なり。かの翁が画人に伝へてかゝせたるもある歟、今は目馴ざる物多し。又或人のいふ、明和七年再御来迎といふ物おこなはれしことあり。其刻は仏像をばつくらず、赤き紙にて日の出のかたちをなし、烏を画し物なりとぞ。是富士山の行者が、日の出を御来迎といふにもとづきての製にやあらん。この江戸にしきは古きによりて画るなるべし。

〔4〕『守貞謾稿』巻之二十八[10] 喜田川守貞著、天保八年（一八三七）～嘉永六年（一八五三）刊

①御来迎ノ機関

佛像ハ、紙ノハリヌキ、或ハ、木製也。後光ハ、黄紙ヲ帖シ、仏像トトモニ竹筒ニ納レ、筒ヲ探レバ、図（図略）[11]ノ如ク出テ、筒ヲ上レバ、再ビ納ル也。

此弄物、元禄ヨリ安永ノ間、凡百年廃セズ。

再ビ明和中、賣之ノ時ハ、仏像ヲ造ラズ。赤紙ノ旭ニ代ヘ、烏ヲ画ク。

②（享保十二年、山本九左衛門版目付絵）

十、ごらいかうの、からくりが三文。

〔5〕『続飛鳥川[12]』 筆者未詳

おんとりさ、売声、おんとりさる三文、与五郎が三文、御来迎々々々三文、

〈解説〉

御来迎の起源は明らかではないが、宝永五年（一七〇八）の序のある『博多露左衛門色伝授』に、「ごらいかうは大坂のしだしでごんざるゑい」とあることから、江戸時代中期以前に大坂で考案されていたものと思われる。『還魂紙料』に掲出された正徳享保頃の絵双六や『守貞謾稿』に見える享保十二年（一七二七）版行の目付絵には、御来迎売りのの姿が描かれており、十八世紀前半には流行を見ていたといえる。

『還魂紙料』には、老人の話から描きおこした御来迎の図が載せられているが、その構造は『江都二色』と明らかに異なっている。『還魂紙料』の図は、筒の下に棒がついており、筒の側面からはひもが出ている。さらには筒の下部に横棒がついている。それに対し、『江都二色』の絵は竹筒の側面から横棒が出ているだけである。おそらくこの横棒を上げ下げすることで、仏像と後光を出入りさせるのであろう。いずれにしても、『守貞謾稿』所載の目付絵や『続飛鳥川』に「御来迎三文」とあることから、つくりは簡素であったと思われる。

また、『還魂紙料』によると、明和七年（一七七〇）には、後光の代わりに赤紙で日の出をつくり烏の絵を描いた新種の御来迎が出現したことが記されている。御来迎を御来光に置き換えたものであろうが、実際にその図を掲げた文献は見あたらない。安永二年（一七七三）刊行の『江都二色』に、旧型の御来迎が描かれていることにも疑問が残る。着想・デザインともに旧型の方が勝っているといえ、庶民のあいだに広く受け入れられていた来迎思想とも相俟って、旧型の御来迎が一般に指示されていたのではないだろうか。

㈢ ずぼんぼ

「ずぼんぼ」は、和紙で作った長方形の箱に頭・尾・足を付けて、獅子や虎の形に仕立てたもので、足の先には蜆の貝殻が付いている。これを屏風や部屋の角など衝立となるものの前に置き、団扇で扇ぐと、胴体の箱に風が入りふわふわと浮きあがる。四本の足につけられた蜆貝が錘の役割を果たし、飛び上がってしまうことなく空中で微妙に揺れ動く。風の流れを目に見えるかたちで表現した、単純ながらたいへん優れた玩具である。

〈史料〉

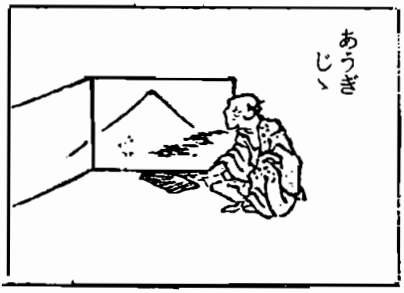
〔1〕『仮里択中洲之華美』[13]　内新好著、天明九年（一七八九）刊

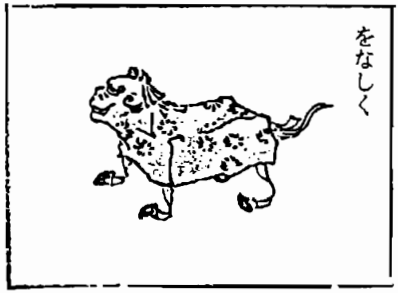
枕びやうしにあらねども、アレハどつこい〳〵、コウレハ三介まつたり〳〵と、團扇ではたらく獅子の足は、蜆貝をめしつぶで付ケ、二まい屏風を小楯に取、船頭にあらねども、乗合はかまひませぬ、

〔2〕『嬉遊笑覧』巻六下[14]　喜多村信節著、文政十三年（一八三〇）刊

○飛人形は竹の串を膏薬に捻り付てはね返らす張子人形なるべし「描金画譜」に笠着て匍匐る人形みえたり、今浅草寺雷門にて売る亀山の化物などいふは張子二つにて一つは上に着せ、はねかへれば脱て形かはるやうにしたり、いと近き物なり。（中略）此外に紙を方にたゝみ獅子舞の形に作り、足にしゞみ貝を付て団扇にてあふぎをどらするものあり、

〔3〕『万職図考』初編[15]　葛飾載斗画、天保六年（一八三五）序





〔4〕『釈迦八相倭文庫』第十編〔万亭応賀作・一陽斎豊国画、嘉永三年（一八五〇）刊〕の引札[16]　立斉画、錦重堂版

〔5〕『風俗画報』一一〇号　明治二十九年（一八九六）、東陽堂刊
「江戸市中渡世種」大竹政直画

とんだり
はねたり
売

〔6〕『うなゐの友』三編　清水晴風著、明治三十九年（一九〇六）刊

ずぼんぼ

此玩具ハ天保年頃より行る獅子或ひハ蛸なと紙にて製四足の所へ蜆貝を付る團扇にてずぼんぼん〳〵ずぼんぼたらたちやつらにくやいけのどんがめならバさらの相手にいたしますと言てあをげは自然に伝動して興ある玩具なり

〈解説〉

江戸時代、ずぼんぼは「とんだりはねたり」（飛人形・亀山のお化けなどともいう）という玩具とともに、江戸浅草の浅草寺門前で売られていた。『嬉遊笑覧』の飛人形の項に、「紙を方にたゝみ獅子舞の形に作り、足にしゞみ貝を付て団扇にてあふぎをどらするもの」と記されているの

は、紛れもなくずぼんぼのことである。明治期に出版された『風俗画報』所載の「江戸市中渡世種」のなかにも、とんだりはねたりとともにずぼんぼを売る店が描かれている。

ずぼんぼという言葉の意味は判然としないが、獅子舞のときの囃子詞だと言われている。『旅と伝説』第四郷土玩具号では、摂津地方の民謡として次のような詞が紹介されている。[17]

ずぼんぼぇ、ずぼんぼぇ、ずぼんぼならこそ面憎や、
お池のどん亀なればこそ、ずぼんぼぇ。

これは、『うなゐの友』にみえる囃子詞と類似している。この民謡が遊びのなかにとり入れられたのかどうかは定かではないが、ずぼんぼは獅子の形に仕立てられていることから、獅子舞の際の囃子詞を玩具の名前に用いたといってよさそうである。

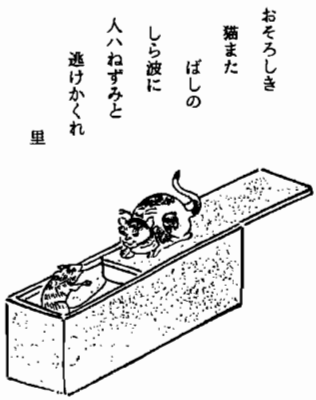
『日本郷土玩具』東の部[18]や『旅と伝説』第四郷土玩具号[19]には、獅子と虎の二種類のずぼんぼが、また、『うなゐの友』には蛸があると示されているが、江戸時代の文献には虎や蛸の存在は確認できない。玩具の名称の由来からみても、当初のずぼんぼは獅子の形をしたもの一種ではなかったかと考えられる。

㈣ 猫と鼠

「猫と鼠」は、猫が鼠を捕食する習性を玩具化したものである。木箱の蓋の上に土製の猫がのっており、蓋を後方にスライドさせて箱を開くと、中から鼠が顔をのぞかせる。再び蓋を前方へスライドさせると鼠は箱の中へかくれてしまう。猫が後退すると鼠が現れ、猫が追うと鼠は逃げる。猫と鼠の追いかけっこを見事に表現したからくり玩具である。

〈史料〉

〔1〕『江都二色』　北尾重政画・弄籟子讃、安永二年（一七七三）、鱗形屋孫兵衛刊



〔2〕『日本郷土玩具』西の部　武井武雄著、昭和五年（一九三〇）、地平社書房刊

大阪の木製玩具

〔猫と鼠〕箱は木製だが本尊の方は土製、長さ四寸位の細長い黄色な木製の蓋に型抜の素朴な土偶猫がつけてある。蓋裏の滑車にはこれと同類の鼠がつけてあって、蓋を引出すとピョコンと出現するが、挿込むとクルリとかくれて了ふ。その動作敏捷なので猫に追はれる鼠の感じが巧みに捕へてあって、場末の雑玩いつもこの種の洒落気とユーモアとに豊かなのは嬉しい。これ亦セルロイド時代としてはひどく穢らしいのでアホラシイとあって數年前に製作を絶って了った。

〔3〕『旅と伝説』第四郷土玩具号　昭和六年（一九三一）、三元社刊

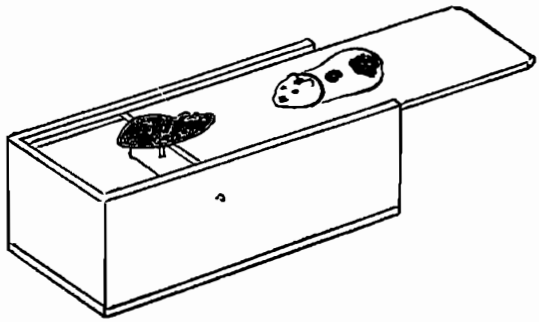
武田眞一著「朝鮮の玩具」

猫と鼠　江戸時代の玩具として鰹節箱の上に鼠が居て蓋を引けば下から猫が出て来て鼠は逃げかくれる日本の玩具そのまゝにて、三寸五分の一寸五分位の箱なり、朝鮮古老の言によれば二百年前より行はれしと云ふ。日本の江戸から渡ったものやら、この朝鮮鼠が内地へ来たものやら興あることなり。

〔4〕『おもちゃ画譜』第一集　川崎巨泉著、昭和七年（一九三二）刊

猫鼠の玩具

猫が鼠を捕へるさまを面白く作ったもので、薄板製の箱



に土焼の小さい猫と鼠を箱の蓋の表と箱の中とにとりつけ蓋の開閉によって其ありさまを彷彿させるように出来てゐる、此玩具は上方地方にも、又江戸にも出来てゐたが、外國にも此式のものがあるから、或る時代に何人かゞ眞似たものではないかとも思はれてゐる。大さは一寸二三分角の長方形の箱で、長さは四寸位ひ（大阪製）

〔5〕『上方』郷土玩具号　上方郷土研究会編、昭和十五年（一九四〇）、創元社刊

前田たらちね著「滅び行く大阪の郷土玩具」

猫と鼠。木製の箱の蓋を引出すと鼠が飛び出る仕掛、押込むとクルリト箱の中に入るユーモアにとむ童玩。（赤松現存）

〈解説〉

猫と鼠は江戸時代に考案されたものと思われるが、安永二年（一七七三）に刊行された『江都二色』以外の近世文献には見当たらない。江戸時代の玩具についてまとまった記述のある『嬉遊笑覧』や『守貞謾稿』にも、猫と鼠については触れられていない。おそらく江戸時代中期に江戸において流行をみた猫と鼠も、地方へ流布しないまま江戸時代後期には衰退あるいは廃絶してしまったのではないだろうか。

ところが、昭和初期の文献には猫と鼠についての記述を散見することができる。大阪の玩具として紹介されているものが多く、『日本郷土玩具』では昭和の初頭に廃絶したとなっているが、『上方』誌の記事から、大阪では細々とながら戦前まで製造されていたことがわかる。文末に見える「赤松現存」の赤松とは、昭和十五年（一九四〇）七月に発行された『上方』続郷土玩具号誌上「大阪玩具座談会」[20]に、語り手として出席している玩具製作家赤松十吉氏のことであろう。

『江都二色』の絵と『おもちゃ画譜』に描かれた絵を比較すると、その作りに差異があることがわかる。まず、猫と鼠の位置であるが、『江都二色』では猫が蓋の前方におり、蓋を開けると鼠が立ったような形で箱のやや後方に現れている。一方、『おもちゃ画譜』では猫が蓋のほぼ中央に位置し、箱の中から現れる鼠の姿勢も蓋に対してほぼ水平である。また、鼠が現れる仕掛けの部分も明らかに異なっている。『江都二色』では弧状の紙のようなものが見えて

いるのに対し、『おもちゃ画譜』に描かれたものは鼠の下に棒がついており、箱の両側面にわたされた軸に固定されている。このような違いはおそらく近代に入って量産されるようになったためではないかと思われる。『おもちゃ画譜』に見られる猫と鼠は、その人形の作りも簡素であることから、からくりを含め全体的に単純化されたのではないだろうか。

また、朝鮮にも同様の玩具が存在したことが『旅と伝説』に記載されているが、日本のものと猫と鼠の位置が逆になっている。「日本の玩具そのまゝにて」とあることから、筆者の単純な誤記ともとれるが、史料に乏しく実態は判然としない。

むすびにかえて

本稿では、「からくり」を仕掛けという意味の広義にとらえ、動かして遊ぶことのできるおもちゃをからくり玩具と呼んでいる。これら江戸時代の玩具は、木・竹・紙・土・布・糸などの自然素材をおもな材料としているが、作り手は素材のもつ特徴を最大限利用して、単純な仕掛けながら実に複雑な動きや表情を表現している。玩具に、当時の人々の自然に対する知識の深さや技術の高さを見てとることができる。また、ここに掲げた史料からもわかるように、近世においては、大人たちが玩具に対してたいへん高い関心をよせている。

今回は、玩具そのものについて若干の考察を加えたにすぎないが、こうした江戸時代の庶民生活における玩具の位置付けや、当時のからくり技術に関しても考察が必要と思われる。これらの点については、別稿を期したい。

また、今回は江戸期に流行をみた四種類の玩具を取り上げたが、近世の文献や絵画に見られる同様のからくり玩具は、筆者が確認しているだけでも約百種類に及んでいる。今回紹介できなかった玩具についても、別の機会を得られれば幸いである。

註

(1) 中村幸彦・日野龍夫編『新編稀書複製会叢書』第三十六巻（一九九一年、臨川書店）所収

(2) 中村幸彦・日野龍夫編『新編稀書複製会叢書』第三十七巻（一九九一年、臨川書店）所収

(3) 朝倉治彦編『日本名所風俗図会』(一九八八年、角川書店)所収
(4) 『日本随筆大成』別巻第十巻(一九九六年、吉川弘文館)所収
(5) 『うなゐの友』復刻版(一九八二年、芸艸堂)
(6) 国書刊行会編『新群書類従』第五(一九七六年)所収
(7) 『江都二色』(奈良大学文学部鎌田研究室蔵)
(8) 『日本随筆大成』第一期第十二巻(一九九三年、吉川弘文館)所収
(9) 原本所載の図は、前掲『江都二色』の御来迎図の模写であるため、ここでは省略した
(10) 朝倉治彦・柏川修一編『守貞謾稿』第四巻(一九九二年、東京堂出版)
(11) 原本所載の図は、前掲『江都二色』の御来迎図の模写であるため、ここでは省略した
(12) 『日本随筆大成』第二期第十巻(一九九四年、吉川弘文館)所収
(13) 国書刊行会編『徳川文芸類従』第五巻(一九二五年)所収
(14) 『日本随筆大成』別巻第九巻(一九九六年、吉川弘文館)所収
(15) 『万職図考』(国立国会図書館蔵)
(16) 『釈迦八相倭文庫』第十編引札(奈良大学文学部鎌田研究室蔵)
(17) 『旅と伝説』第四郷土玩具号(一九三一年、三元社)九七頁
(18) 武井武雄『日本郷土玩具』東の部(一九三〇年、地平社書房)
(19) 『旅と伝説』第四郷土玩具号(一九三一年、三元社)一二頁
(20) 『上方』続郷土玩具号(一九四〇年)二八頁